アメリカにおけるオープン・エデュケイション（その一）

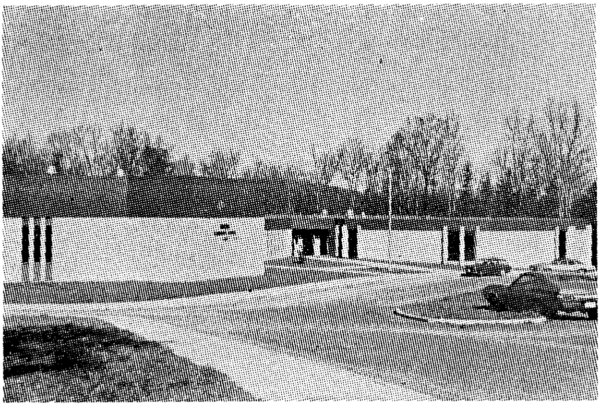
白井堯子

オープン・エデュケイションとの出会い

私の家族は、昨年三月までアメリカ、ヴァージニア州のシャーロッツヴィルで二年あまり生活した。ヴァージニア州は、アメリカで最も歴史の古い州としてその伝統を誇っており、私たちが住んだ所も『独立宣言』の起草者・三代目の大統領トマス・ジェファスンの家や、彼が晩年に創設した州立ヴァージニア大学などがある小都市で、知的な水準はかなり高いが、アメリカの中でも最も伝統的で保守的な雰囲気が漂っている場所の一つである。

このような南部の伝統の地にも、新しい教育実験の波が押し寄せ、この地で学校教育を受け始めた私の娘晶子は、偶然にもそれを〝オープン・エデュケイション〟として経験したのである。この教育法の特徴や効果については、日本でも最近ぼつぼつ紹介がなされ始めているし、沼津にある加藤学園のように、これを現実に採用している所もあるので、ここでは、一人の外国人の子どもが、かの地でどういう形でオープン・エデュケイションを与えられたか、そしてそれをどんなふうに受けとめ、どう成長していったかを母親の目で記してみたいと思う。

五歳半で渡米した晶子は、先ずルーテル教会に附属した一クラス七人という家庭的な雰囲気の幼稚園に入り、夏には、あの有名なニイルのサマーヒル・スクールで先生をしていた方が始めた幼稚園の夏期学級に通って、アメリカの子どもたちと遊ぶことや、英語に少しばかり慣れていた。そして八月には、六歳の誕生日を迎え、いよいよ九月から小学校に入ることとなった。丁度その頃、シャーロッツヴィル市の郊外に新しい公立小学校が一つ創立され、八月末



◀写真1
オープン・エデュケイション向けに設計、新築されたグリア小学校。

に、その新しい学校の校長先生から次のような手紙を頂いた。

「私は新しい学校長として、今年度、皆様や皆様のお子様と共に仕事をしていくのを楽しみにしています。何か御子様の進歩について御質問があったらお気軽に私や他の先生方にお尋ね下さい。新しい学校の名前は、M・C・グリア小学校です。新学年を目の前にして、われわれは興奮しています。どうしてかというと、あなた方の御子様に優れた教育の機会を与えるために必要なスタッフ、設備、道具を備えていると感じているからです。この一年が興味深くチャレンジングな経験となるように期待しています。この一年間をあなた方の御子様にとって実り多いものにするために、どうぞ御協力下さい。

グリア小学校は、個別指導教育（Individually Guided Education I・G・E）を行なっていきます。このI・G・Eというプログラムは、一人一人の子どもに最も適した学習スタイル、学習程度、学習目標を与えうる先生を育てていくということをも目的としています。I・G・Eでは、教育計画とその実施にすべての先生がかかわります。一人の先生だけが行なうよりも沢山の先生が一緒に行なう方が、より良い成果が生まれると信じるからです。

生徒は従来のように学年でグループ別されるのではなく、年齢によって分けられます。皆様は、ある学年に属する子どもたちのすべてが、どの課目においても同じレベルにいるという考え方に基づいた教育はおかしいとお考えになると思います。I・G・Eにおいては、子どもは○○先生のクラスの生徒であるとは呼ばれません。生徒は、一つのユニット（ティーム）のメンバーなのです。一つのユニットには、約百人の生徒と、二人の助手の先生、五人の専任の先生（そのうちの一人はユニット・リー

ダー）がいます。一つのユニットにいる生徒の年齢差は三歳までです。このような構成によって、子どもは自分の属するユニットの中で数多くの先生と接することができるし、また同時に違った年齢の子どもとも関係を持つことができるわけです。

子どもたちは、また大小さまざまなグループの中で学習します。例えば、一日の数時間を小さなグループの中で過ごします。そこでは、自分の意見を発表する、人の意見をよく聞く、そしていろいろな状況によく反応する機会を多く持つことができます。この他に、個人学習をも進めていきます。（以下省略）」

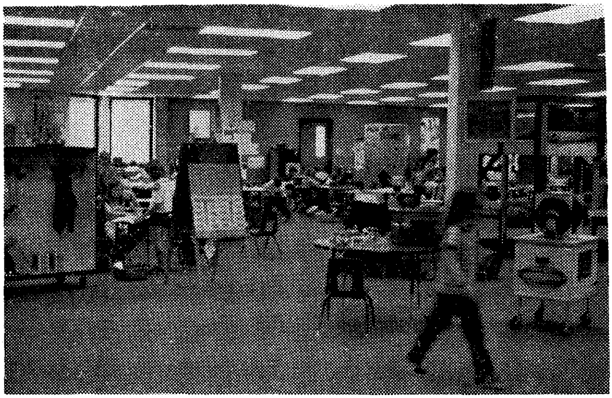
従来の学級担任制を否定したティーム・ティーチング、子ども一人一人の要求、興味、学習能力、速度の違いを重要視した無学年制などをうたったこの校長先生からの手紙は、私の胸の中に、大きな期待と同時に一抹の不安をもたらした。しかし、晶子が入学したその日から、このオープン・エデュケイションは私を魅惑したし、また日本に帰国して日本の型にはまった教育に接すれば接する程、その魅力は私の心を捕えて離さない。

オープン・スペイスの学校建築

晶子の小学校は、ティーム・ティーチング、無学年制、I・G・Eなどの新しい試みを行なうために設計された新建築の贅沢な学校であった。広大な林の中に斜面を利用して建てられた建物は、地上一階、地下一階（半地下式）、冷暖房完備で、一階の中央はミーディア・センター（図書室）、そしてそれを取りまくように三つのユニットのためのものすごく広い部屋（普通の教室の十倍以上）があり、地下には二つのユニットのための広大な部屋二つと、幼稚園がある。これまでのようなクラス単位の四角い教室などは存在せず、各ユニットに与えられた広大な部屋は、本棚やコートかけなどによって幾つかのコーナーに仕切られている。写真2に見られるように、仕切りのコートかけや本棚などには車がついていて、簡単に移動させることができる。これは大変意味のあることで、個別指導、グループ指導、一せい授業などをする際に、その目的に適した広がりを自由に作れるわけだ。そして床には絨毯が敷きつめられ、子どもは床に坐ったり腹ばいになったり、自由な姿勢で学校生活を楽しめる。

この広大な教室の中には、日本では見慣れないものが幾つかある。例えば二メートル以上もあるやぐらだ。子どもはこの上で本を読む。子どもは高い所へ登ることが大好きだから、このやぐらは彼らの冒険心を満足させ、また広い視野を持つ訓練にもなるであろう。その他、父母が作ったさまざまなゲーム教材を並べたゲーム・センター、音楽や英語の時間に使う教材をイヤホーン

▶写真2
ユニット単位の部屋。教室の壁がなく、広い面積が棚などで自由に仕切られている。



で聞くリスニング・センター、絵を描くための道具がそろっているアート・センターなどもあり、少し離れた所には、小教室（エックステンション・ルーム）がある。とにかく、すべてが固定観念にとらわれることなくアイディア一杯、道具も一杯という感じであった。

また特筆すべきことは、建物の内装、設備などが実に色とりどりに華やかなことだ。ユニットによって部屋の壁の色も絨毯の色も違う。まるでデパートか博覧会にでも行ったようで、少し色が多過ぎて落着きがないのではないかという感想をもらす人もいた。しかし子どもに言わせると、とにかく楽しいとのことで、日本の学校のように服装や持物についてのきまりも全くなく、皆が色とりどりの部屋で自由に楽しく学んでいた。先生にとっては、子どもが学校を楽しんでいるかどうかが最大の問題で「晶子は学校生活を楽しんでいますか」と何回も聞かれたし、また、このように楽しませるための工夫が沢山なされている。

ユニットにおける学習

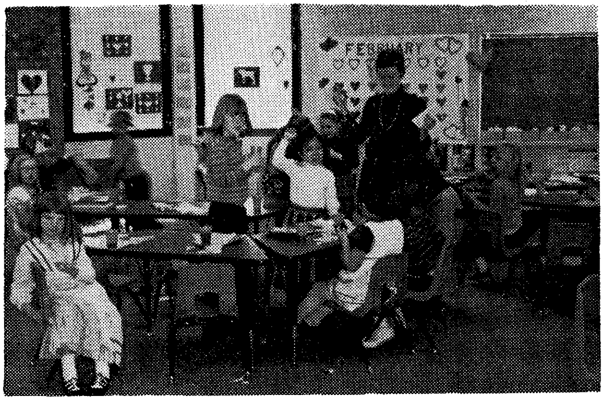
九月になって、いよいよ学校生活の最初の日を迎えた晶子は、おやつを入れたランチ・ボックスを持って、朝八時にあこがれの真黄色のスクール・バスに乗っかった。日本の入学風景とは全く違い、親が晴着を着て学校へ子どもを連れて行くわけではなく、入学式すらもない。夫が早朝に起きてスクール・バスを待つアパートの子どもと共に娘の姿を写真に撮ったのが、彼女の長い学校生活の開始を祝福する唯一の〝儀式〟であった。学校ではいきなり授業が始まり、しかもスクール・バスで全校の生徒を送り迎えする都合上、何と六歳の一年生に対しても六時間の授業がなされ、朝八時にバスに乗ると帰宅は二時半になる。片言の英語しか喋れない子どもが、こんなに長

く英語の生活を強いられるのは誠に拷問に等しかろうと親としては心を痛めたものである。

しかし、意外や意外、その後、晶子は「ああ、面白かった！」と言って毎日帰ってきたのである。何がそんなに面白かったのかと、興味半分、心配半分で根掘り葉掘り問いただしてみると、答は実に他愛ない。お昼寝の時間に友だちがうす目をあけたとか、先生が皆の名前入りのクッキーを焼いてきて下さったとか、ゲームや映画が楽しかったとか、お手洗を使う時には〝ストップ〟と書かれた札をドアにかけて他の人にドアをあけられないようにすることになっているとか、キャフェテリヤでフランス人形みたいに可愛らしい女の子がいたので隣に座って名前を聞いてみたら〝メアリ〟というギリシャ人だったとか、校長先生が真赤なシャツとズボンを身につけていたとか、ＡＢＣを書く練習をして上手に書けたとほめられ星のシールをもらったとか、スクール・バスが途中でえんこしたとか、上級生の男の子に〝Chinese! Chinese!（中国人）〟と言われて足を踏まれたけれども隣にいた女の子が〝Don't listen!（聞くな！）〟と言ってくれたとか、夕食の時間には話題が尽きなかった。日本の感覚でいうと遊んでばかりいるような最初の二週間の学校生活の中で、実は色々な観察、テストが行なわれていたらしい。

校長先生の手紙に見られるように、子どもはその年齢と能力（学習能力だけではない）に応じて五つのユニットのいずれかにグルーピングされる。最年少の晶子が入ったユニットＡは、約百人の子ども（多くの子どもは六歳で、七歳八歳の子どももいる）五人の先生（そのうちの一人はユニット・リーダー）、二人の助手の先生によって構成されていた。先ず子どもたち百人は二十人ずつグループに分けられて、一人の先生をホームルーム・ティーチャーとして持つ。晶子のホームルーム・ティーチャーは、オニール先生であった。ホームルーム単位の活動は、お誕生会などの直接学習とは関係のない事柄についてであり、英語や算数などの学習は、課目毎に、このホームルームのメンバー構成とは無関係に能力に応じて分けられたグループ単位でなされた。

英語を例にとれば、先ず百人の子どもはその英語の能力に応じて五つのグループに分けられ（人数は均等ではない）、それぞれのグループに先生が一人ずつつく。晶子の属したフリーマン先生のグループは能力的にいって真中のクラスのグループで、バナナと名づけられ約十五人の子どもが構成メンバーであった。この十五人は、さらに能力別に五人ずつＡ、Ｂ、Ｃの小グループに分けられ、晶子はテストの成績が良かったのかＡグループに入れられた。



◀写真3
ホームルーム単位で聖バレンタイン・デーのパーティーを楽しむ子どもたち。

学校の一日

この具体的な勉強方法や、言葉も習慣も違う外国人の晶子を魅了しているグリア・スクールの秘密を探るべく、学校生活を夫と二人で見学させてほしいと校長先生に頼んでみた。この小学校には〝授業参観〟などという〝儀式〟はないので、全く私的な希望だったのだが、校長先生はすぐ応諾してくださり、ある日、夫と共に十数年ぶりに小学校の一日を過ごすこととなった。

子どもたちの学校生活は先ずスクール・バスに乗ることから始まるので、バスが子どもたちを拾い集めるたびにワーワー、キャーキャー大騒ぎ。運転手の太った小母さんに怒鳴られながら学校に着くと、子どもたちはそれぞれのユニットの部屋へこぼれるように走り去る。晶子たちは、ホームルーム・ティーチャーのオニール先生を囲んで〝ショウ・アンド・テル〟を始めた。これは、子どもたちが前日までの生活の中から何でも面白いものを持ってきて、それを皆に示し、説明する時間である。庭でつかまえた虫でも、親からのプレゼントでもなんでもよい。子どもはそれを説明することによって話し方の練習をすることになるし、先生も子どもの生活を知ることができるのだ。晶子は日本人形を持っていって皆に見せていた。これが続く二十分間に、バスに乗りそこねて遅刻した子どもが、親の車で次々と到着する。

次はいよいよ英語の時間だ。晶子の属しているバナナ組は三つに分かれて勉強を始めるのだが、この様子は次回に詳しく述べることにしよう。また次回では、英語においてハンディキャップを持っている晶子を伸ばしていくために特別に組んで下さった個別指導、PTAの働き、通信簿などについても紹介してみたいと思っている。

（つづく）

（慶応大学）